

教員養成課程における音楽実技カリキュラム構築に関する一考察

A Study on Constructing a Music Performance Curriculum in the Teacher Training Course

島川 香織*

Kaori SHIMAKAWA

抄 録

21世紀型学力の育成としての大学での保育士・幼稚園教諭・小学校教員養成課程における音楽実技カリキュラム構築へのコンセプトを検証することを目的とする。

検証の結果、音楽理論や読譜スキルと結びつけた演奏法、教師による模範演奏や助言、ワークシートの記述や教師・生徒間のディスカッションを通じた目標の明確化、自信と満足感を伴った自己形成につながる音楽実技カリキュラム構築のコンセプトが導かれた。

I はじめに

知識基盤社会の到来に対応した「21世紀型学力」の育成についての論議がなされ、学習科学の興隆によって「教授」や「指導」だけでなく「学習」や「学習環境」への着目が高まっている。¹⁾ 筆者の勤務校では、保育士・幼稚園教諭・小学校教員養成課程における保育内容表現や初等音楽科教育法という資格取得のための授業科目に加え、1年生春学期(前期)から4年生春学期にかけ、音楽実技の個人レッスン・グループレッソンを軸とする音楽Ⅰ～音楽Ⅷ(ⅠⅡⅣⅥⅧは「器楽」Ⅲは「伴奏法」Ⅴは「声楽」Ⅶは「器楽・指導法」、ⅠⅡは資格取得必修科目、2022年度現在)という構成の音楽実技授業カリキュラムがある。このカリキュラムを通して、音楽実技のソロ曲や弾き歌い等、直接学生への実技指導に携わる中で、筆者は、教員養成としての実技指導という観点から授業実践を行うことができていないと感じている。将来教育現場に立つことを目指す学生に対し、音楽実技のレッスン内容が、教育者にふさわしい広い視野に立って専門科目の内容を理解したうえで、学生自身が自ら深い学びにすることにつながるような学習環境を提供するのに必要十分条件を満たしているとは思えなかったからである。それでは、どのようにすれば、直接的な演奏法の「教授」以外に、知識創造につながる学生の主体的な学びを導き学習環境を整えることができるのであろうか。本稿では、このような問題意識を基に21世紀の学びにつながるであろう教員養成課程での音楽実技のカリキュラム構築に向け、21世紀型学力、学習科学における認知的徒弟制、学習意欲への配慮の観点から考察を試みる。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

II 21世紀型学力

II-1 21世紀型学力

森敏昭(以下森)によれば、「21世紀型学力」とは、旧来の知識習得モデルの学習観を脱却し、知識創造モデルの学習観に基づき、ディペンダブル(dependable)ポータブル(portable)サステイナブル(sustainable)の3条件を備えた学力のことである。²⁾

森によれば、ディペンダブルな学力とは信頼できる学問的根拠に基づく学力を意味し、従来学校教育で育成がなされてきた。ポータブルな学力とは「持ち運び可能」な学力のことであり、学校で習得した知識が学校外でも役に立つことができる学力を意味する。サステイナブルな学力とは、学習が学習本来の目的である自己形成のプロセスから切り離されず、自己実現を目指して自己を成長させることにつながることで、生涯学習し続けることのできる学力を意味する。

一般的に、大学での養成課程での実技レッスンを通して、ある作品の演奏を仕上げるといった意味合いでは、ディペンダブルな学力を学生に習得させることはできているのではないかと。しかし、卒業後も、ポータブルな学力を身につけ維持したうえで、教育現場で子どもたちを目前にして、子どもたちのテンポ感やリズム感をすばやく察知して自分自身の演奏を子どもたちに適用させ、瞬時に判断して子どもたちの表現のよさを導き出せる学生は、大学で学習する以前から演奏に熟達している者に限られるのではないだろうか。また、演奏に熟達している学生でも、サステイナブルな学力を養成課程で習得し、音楽(文化)を教育現場やその他の機会に独自の考えや感性をもって学びを深めようとする学生は、いかほどに存在するといえるだろうか。

このような問題意識から、養成課程での音楽実技カリキュラム構築に向けたコンセプトについて考察を試みる。

II-2 21世紀型学力の育成

森は、前述したディペンダブル・ポータブル・サステイナブルの「21世紀型学力」の育成について、第一の条件として「習得機能」と「活用機能」のバランスを保つこと、第二の条件としてメタ認知能力の育成、第三の条件として本物の学習意欲の育成を挙げている。³⁾ 森によれば「習得機能」と「活用機能」の両者を統合してバランスを保つことが必要である。学校での「意義ある学び」とは学校で習得した学校知の多くである良定義問題(正解と解決方法が明確に定義されている問題)を解くための知識であるが、これらの学校知を日常生活で必要となる日常知を関連づけて活用するためにメタ認知能力が必要となる。このことから、将来教育現場での音楽実践を目標とする学生に対しても、「習得機能」と「活用機能」のバランスを保ちながら、音楽実技経験におけるメタ認知能力を育成することが可能であれば、習得した知識・技能を現場にいる子どもたちに必要な配慮や支援を行いながら、活用することにつながるのではないかと考えられる。

森は、メタ認知能力を通して「いかに生きるべきか」「そのためにいま何を学習するべきか」という自己実現を目指した自己向上や成長させようとする自己形成に結びつくとし、「自分史の物語」を紡ぎ出し(他者と)共有し交流することで創発的文化創造の「社会史の物語」が編み上げられることが「知

「知識創造モデル」の学習の本質であるとしている。森によれば、学生であるときに習得した学力を基盤にメタ認知能力を育てる学習が「知識創造モデル」に結びつき、その学びを生涯にわたって持続するためには、学習意欲のエンジンをかけることが不可欠となる。言うまでもなく、そのような広い視点で自らの学びを深めていくことのできる教育者の養成が望まれていると考えられる。

Ⅲ 認知的徒弟制における音楽実技カリキュラム

前章ではメタ認知を通じた「習得機能」と「活用機能」のバランスが学習の本質としての「知識創造モデル」につながることを示された。本章では、この「知識創造モデル」に関連して協調で創造へとつなげる知識創造の営みを学習であるとする学習科学の基本的事実を示したうえで「認知的徒弟制」を音楽実技カリキュラムと関連させて考察する。

Ⅲ-1 学習に関する基本的事実

学習科学(the learning sciences)では、学習とは、ヒト・モノ・コトの相互作用の中で成立する社会的事実であり、主体的に知識を習得しつつ他者と共有し協調で創造へとつなげる知識創造の営みである。森によれば、知識をいかに教授するか、効率的な知識伝達を意味する教授主義が基本的概念であるのに対して、学習科学の学習観では、知識創造のための主体的な学び合いがなされる学習環境をいかにデザインするかが大切となる。⁴⁾

伝統的な学校教育の見方としての教授主義(instructionism)では、知識とは問題解決に必要な世界についての事実と手続きの集合であり、生徒は比較的単純な事実と手続きから始め、次第に複雑な事実と手続きを学んでいくことが推奨されている。しかし、今日の社会では知識労働が経済の基盤となっており、事実と手続きを記憶しているだけでは不十分で深い概念的理解や、新しいアイデア、理論、知識、作品を生み出すために創造的に働く能力が必要とされている。⁵⁾

それに対して、米国学術研究会議(National Research Council)によって公刊された(Bransford, Brown, &Cooking, 2000)学習に関する基本的事実、以下となる。⁶⁾

- ① より深い概念的理解の重要性として、事実と手続きに関する知識は、それが適用可能な状況と、状況に応じて知識を修正する方法を知っている時にのみ役立つ。
- ② 教授技術だけでなく、生徒が能動的に参加する学習における学びの過程に焦点を当てる
- ③ 事実や手続きを教えるだけでなく、現実世界の問題について推論することを可能にするより深い概念的理解に到達するよう支援することが重要であり、生徒たちが熟達した大人のパフォーマンスを示すのに必要なあらゆる知識を学べるように支援する
- ④ 生徒たちの既存知識のうえに学びを構築する
- ⑤ 生徒たちの自分の知識の状態を思慮深く分析する機会を与える

このような学習科学における学習に関する基本的事実を踏まえ、次節で学習科学における「認知的

徒弟制」と音楽実技のカリキュラムとの関連を考察する。

III-2 認知的徒弟制

学習科学における「認知的徒弟制」(cognitive apprenticeship)とは、手工業に代表されるような伝統的な徒弟制にみられる教授・学習上の利点を、認知的な知識やスキルを扱う学校教育の科目にも広く活用しようとするものである。⁷⁾ 「認知的徒弟制」の教授・学習上の利点は①熟達者の思考過程や問題解決方法を見本として提示し、学習者が課題の全体像を把握し見通しを持てるようにする②習得すべき知識やスキルが文脈に埋め込まれたかたちで学習できる環境を作り出す ①②では、認知過程を可視化し伝統的な徒弟制(apprenticeship)の利点と結びつけた学習環境をデザインすることが重視されている。

音楽実技のレッスンは、過去を遡ると生徒がひとつひとつの演奏の仕方を逐一指導される教授主義における伝統的な徒弟制に近い形が頻繁にみられたのではないかと筆者は考えている。先生は作品を演奏するための特定の方法を知っておりスキルを伝授することで、生徒は、その領域での専門知識や技術を習得し作品を最後まで演奏できるようになる。

「認知的徒弟制」においても、「伝統的な徒弟制」と同様に複雑な課題を処理するために熟達者が用いる方法を教え概念とそれ自体の意味に対する深い理解を促し、問題解決がなされる状況との間に記憶に定着するよう文脈における学習がなされる。そして、「認知的徒弟制」における「認知的」という特性は、先生や生徒の頭の中の認知過程(思考過程)を目に見えるように学習環境を整えることを導く。⁸⁾ つまり「認知的徒弟制」では、伝統的な「徒弟制」と違い個々のスキルが統合されるよう習得すべきテクニックの有用性を示し、次にそのテクニックを多様な状況で活かす練習をさせることで徐々に課題の複雑さを増やす観点から課題や問題が選定され配列される。また、学んだことを多様な状況で活用できるよう知識を一般化し一般的な原則を明らかにする。

III-3 認知的徒弟制における音楽実技カリキュラム

本節では、学習科学における「認知的徒弟制」の枠組みとしての4つの側面Ⅰ内容(content)Ⅱ方法(method)Ⅲ配列(sequencing)Ⅳ社会学(sociology)を柱とする「認知的徒弟制の環境をデザインするための原則」を示したうえで、⁹⁾ それらに対応できると思われる音楽実技のカリキュラム領域を4つの側面ごとに表1にまとめる。ここでは、音楽実技を何らかの創作をも含む作品演奏とする。尚、表1、認知的徒弟制の環境デザインのための原則及び本文のそれらの諸項目に関する説明は『学習科学ハンドブック第二版第Ⅰ巻—基礎/方法編—』からの引用である。

表1. 認知的徒弟制の環境デザインのための原則と音楽実技カリキュラム

I 内容 熟達化のために必要な知識の種類		[対応する音楽実技カリキュラム]
① 領域知識	教科内容に特定の概念、事実、手続き	音楽理論、読譜→演奏の理解
② 発見方略	課題を達成するために活用する一般的に有効なテクニック	教師からの演奏法の教授
③ 制御方略	解決過程を導く一般的なアプローチ	実技に関するワークシート記述、教師とのディスカッション
④ 学習方略	新しい概念、事実、手続きの学び方についての知識	〃
II 方法 熟達化を促すための方法		
⑤ モデリング	生徒が観察できるように教師が課題を遂行する	教師による模範演奏
⑥ コーチング	生徒が課題を遂行する間、教師が観察、促進する	生徒の演奏に対する教師の助言、ヒントの明示
⑦ 足場かけ	生徒の課題遂行を助けるために教師が支援する	教師による演奏に関する解説動画、解説テキストの提供
⑧ 明確化	生徒が自分の知識や思考を言語化するように教師が促す	教師・生徒間のディスカッション、録音・録画の視聴
⑨ 振り返り	生徒が自分のパフォーマンスを他者と比較できるように教師が支援する	演奏発表+ディスカッション
⑩ 探究	生徒が立ち止まって自分の問題を解決できるように教師が促す	教師の課題設定→生徒の中間課題設定
III 配列 学習活動を配列するための鍵		
⑪ 複雑性の増加	有意味な課題が徐々に難易度を増す	スキルごとに難易度の増加した課題の提示
⑫ 多様性の増加	広い範囲で応用できるようにさまざまな状況で実践する	様々な作品の演奏
⑬ 全体から局所スキルへ	一部分を実行する前に、課題全体の概念化を重視する	演奏モデルの視聴、作品理解
IV 社会学 学習環境の社会的な性質		
⑭ 状況に埋め込まれた学	生徒は現実の課題に取り組む文脈の中で学ぶ	実技を伴う模擬授業、現場での実習

習		
⑮ 実践共同体	有意味な課題を達成するさまざまな方法について話し合う	実技を伴うグループ学習
⑯ 内発的動機づけ	生徒がスキルや解法を学ぶ自分なりの目標を立てる	演奏目標の明確化、学生同士の演奏発表、音楽文化の理解
⑰ 協同の活用	目標を達成するために生徒がともに取り組む	実技を伴うグループ学習

ここでは、表1に示した「認知的徒弟制」の4つの側面に関連づけられた音楽実技カリキュラムの内容を考察する。カリキュラム内容は、ここで考えられるものがすべてではなく、また4つの側面のそれぞれの項目に1対1に対応するものではなく様々な組み合わせが可能であることをあらかじめ断っておく。

I 内容では、学校の講義や実演などで広く扱われている「領域知識」(domain knowledge)に加え、熟達者による問題解決の実践を通して暗黙的に獲得されることの多い「発見方略」(heuristic strategies)がある。音楽実技カリキュラムでは、教師が習得した演奏の秘訣のような知識・技能が教授される。次に「制御方略」(control strategies)はメタ認知方略(metacognitive strategies)でもあり、生徒が自分の目標と照らし合わせて自身の現状を評価し、現時点での困難な状況を分析して解決できる方略を見極め課題の進め方を決定するやり方である。音楽実技カリキュラムでは自らの演奏を省みるツールとして生徒がワークシートに記述したり、教師とのディスカッションを通して教師が適切な問いかけをして問題解決への糸口となるよう導くことで、自分自身のおかれている状況を客観的に認識できるようになる。「学習方略」(learning strategies)は「領域知識」「発見方略」「制御方略」を学ぶための方略で新しい分野の探索や知識の拡張・再構成をすることで「領域知識」「発見方略」「制御方略」を振り返ることで、やはりワークシートに記述や教師とのディスカッションを通して音楽実技の新しいやり方、捉え方を再構築することにつながると考えられる。

II 方法では「モデリング」(modeling)は、熟達者が課題を遂行する様子を生徒が観察し生徒が課題を達成するのにどのような過程を経なければならないか、概念モデルを生徒が作れるようにする手法である。音楽実技カリキュラムでは、教師が演奏の内的過程を説明しながら模範演奏するのを生徒が観察することで、単に模範演奏を生徒に提示するより演奏表現の深いところの学びが促進されるであろう。「コーチング」(coaching)は、教師は生徒が課題に取り組む様子を観察し助言やヒント等フィードバックを与え、生徒が熟達者の実践に近づけるよう考慮して新しい課題を与える手法である。「足場かけ」(scaffolding)は、生徒の課題遂行を助けるために教師が提供する支援のことである。「コーチング」は学習を促進する様々な方法を広く含み「足場かけ」は支援の提供である。音楽実技カリキュラムでの「コーチング」は、生徒の演奏に対して教師が助言やヒントを与え、「足場かけ」では、教師の作成した解説動画や解説テキストを学習することなどが考えられる。

次に「明確化」(articulation)と「振り返り」(reflection)について、「明確化」は、探究型授業で生徒に自分の理解していることを明確化させ理解を洗練させるように促す質問方略がある。音楽実技カリキュラムでは、教師が教師・生徒間のディスカッション、生徒の演奏の録音・録画の視聴を通して、生徒の問題点を生徒自らが認識できるよう質問を投げかけることで、生徒自身が自分の問題点を認識し解決する糸口を見出すように導くことにつながる。「振り返り」は、生徒が自分の問題解決過程を熟達者や他の生徒のやり方と比べ、熟達者の内的な認知モデルと比較することができるようにする手法である。音楽実技カリキュラムでは、演奏発表を振り返り、ディスカッションを通して演奏発表に関する内的過程について明確化と同様の学びを促進することができると考えられる。「探究」(exploration)は、生徒が自分自身で問題解決できるよう導く手法である。そのため大枠の目標を教師が定め、生徒には自分の興味のもてる下位目標に焦点を定めるよう促すことができる。音楽実技カリキュラムでは、例えば教師が最終課題を決定し、生徒が中間目標を自ら決定し実践することなどが考えられる。

Ⅲ配列では、「複雑性の増加」(increasing complexity)「多様性の増加」(increasing diversity)「全体から局所スキルへ」(global before local skills)がある。「複雑性の増加」は、熟達者の遂行に必要なスキルや概念がより生徒から求められていくように課題を配列する。音楽実技カリキュラムでは、スキルごとに難易度の増加した課題を生徒が求めていけるよう配列することができる。「多様性の増加」は、より幅広い方略やスキルが必要となるように課題を配列することである。音楽実技カリキュラムでは、課題となる作品の技能的側面・形式的側面・内容的側面・文化的側面に配慮しながら、生徒の課題遂行能力に応じて様々な作品を演奏できるよう配列をすることができる。「全体から局所スキルへ」は、生徒が活動全体の概念モデルをもつことで生徒自身が目下遂行している部分があるどのような意味をもつのか理解しやすくなり、進捗状況のモニタリング能力が向上し自己修正のスキルが発達する。音楽実技カリキュラムでは、演奏モデルを視聴し作品全体の理解を深めることでなされるであろう。

Ⅳ社会学では、「状況に埋め込まれた学習」(situated learning)「実践共同体」(community of practice)「内発的動機づけ」(intrinsic motivation)「協同の活用」(exploiting cooperation)がある。「状況に埋め込まれた学習」は、実世界の課題の性質を反映した環境で生徒に課題を遂行させ問題解決をさせることである。音楽実技カリキュラムでは、実技を伴う模擬授業や現場での実技を伴う実習が考えられる。「実践共同体」は、参加者が熟達化に関わるスキルについて活発に話し合い、そのスキルに携わる学習環境を作り上げる。音楽実技カリキュラムでは、実技を伴うグループ学習が考えられる。「内発的動機づけ」は、課題が本質的に生徒にとって興味のある目的と関連しているために、生徒がその課題を遂行するような学習環境を作ることで学習に対する内発的動機づけを高めることにつながる。音楽実技カリキュラムでは、演奏目標を明確化させたい学生同士の演奏発表を行うことや、作品背景となる音楽文化の理解を深めることで生徒の内発的動機づけを高めることにつながると考えられる。「協同の活用」は、協同的な問題解決を促進する方法で、生徒たちと一緒に活動させることである。音楽実技カリキュラムでは、目標をもつ生徒たちが協同して実技を伴うグループ学習を

行うこと通してなされると考えられる。

IV カリキュラム構築における学習意欲への配慮

本章では、「21世紀型学力」における「知識創造モデル」の学びに不可欠とされる学習意欲への配慮について触れておく。

J.M.ケラー(以下ケラー)によれば、自信とは、人々のさまざまな生活における成功に対する期待の度合いを示す。¹⁰⁾ここでの中心的論点は、制御(コントロール)の知覚で、日常的な出来事や将来の目標に対して、自分自身がそのコントロールをまったく失った(制御不能になった)と感じた場合、人生が脅かされ落胆させられる。このことから、学習活動においても、教師は学習者が成功して、成功を学習者自身で制御する能力があることを信じられるようにするためにはどうしたらよいだろうか、という視点をもつことが重要となる。

ケラーによれば、内発的動機づけとしての内発的満足感は、あることをマスターしたという感覚からや、自分にとって価値があり挑戦的な仕事に成功した喜びから生まれる。すなわち、教師が学習者の挑戦に最適なレベルで学習者が価値あるものと認める教材や学習活動を設定できれば、内発的満足感を生む場所を設定できたことになる。¹¹⁾それによると、内発的満足感につながることで、人々はある程度の真新しさや自分を優秀であると感じること、知識と個人的な関心や重要と感じる分野のスキルを身につけること、ある程度の自己コントロールと自律を体験することを好む。反対に、成果が予想通りでなかったり、他の人が受けた報酬と比較して不公平感を感じる時落胆する。このことから、学習者が、自分たちの経験を快く思い、さらに学び続けたいと思うようになるための支援として何をする事ができるか、という視点をもつことも重要である。

これらのことから概観的ではあるが、教員養成課程における音楽実技カリキュラム構築において、教師が生徒が不安や恐れをもたず学習成果に対して自分で成功を制御できるという自信につながる目標設定を行ったうえで、適応できる範囲での真新しい課題や自律的体験としてかなり予想通りの成果と正当な評価が得られるようにカリキュラムを構築することが肝要であるといえるであろう。

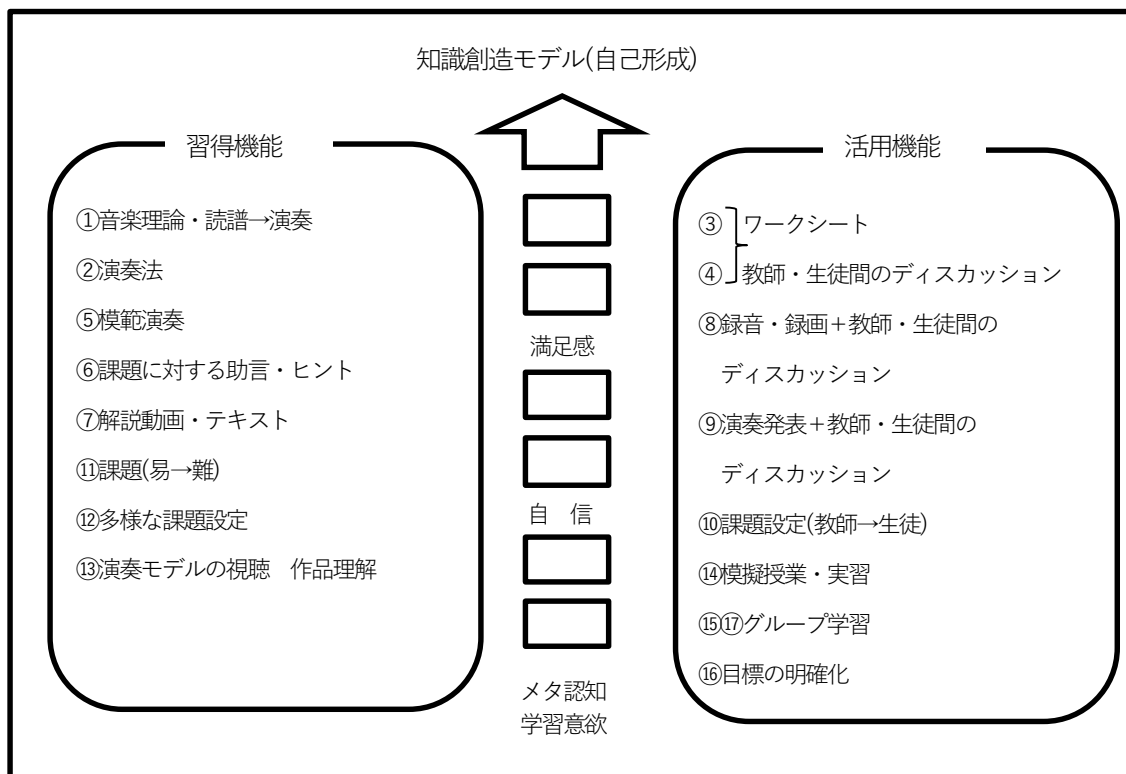
V まとめと今後の課題

ここまで、21世紀の学びにつながる教員養成課程での音楽実技のカリキュラム構築に向け、21世紀型学力、学習科学における認知的徒弟制、学習意欲への配慮の観点から考察を試みた。本章では、21世紀型学力を基盤とする教員養成における音楽実技カリキュラム構築のコンセプトを示す。(図1参照)

音楽理論、読譜のスキルと演奏を結びつけ演奏法を知り、教師による模範演奏や助言、解説を理解して易しい課題から難しい課題へと多様な作品に取り組む習得機能、並行して、ワークシートの記述、演奏発表や録音・録画に対する教師・生徒間のディスカッションを通して振り返り、目標の明確化を行い、模擬授業や実習に個人とグループで取り組む活用機能を通して、メタ認知を基盤とする学習意欲としての自信と満足感を伴った自己形成につながる知識創造を目指す音楽実技のカリキュラム構

築のコンセプトが明らかになった。今後の課題として、どのようにして音楽的内容を伴った具体的実践を4年間という長いスパンの中で設計するかである。

図1. 21世紀型学力を基盤とする教員養成における音楽実技カリキュラム構築のコンセプト
(①～⑱は表1に準ずる)



引用文献

- 1) 森 敏昭監修 藤江康彦 白川佳子 清水益治編著(2015)『21世紀の学びを創る—学習開発学の展開—』(株)北大路書房 pp. i - ii
- 2) 同書 pp. 11-12
- 3) 同書 pp. 12-14
- 4) 森 敏昭 R.K. ソーヤー編 森 敏昭 秋田喜代美 大島 純 白水 始監訳 望月俊男 益川 弘如編訳(2019)『学習科学ハンドブック第二版第I巻—基礎/方法編—』(株)北大路書房 p. iii
- 5) 同書 pp. 1-2
- 6) 同書 pp. 2-3
- 7) 同書 p. 91
- 8) 同書 pp. 94-95
- 9) 同書 pp. 95-100

10) J. M. ケラー『学習意欲をデザインする—ARCS モデルによるインストラクションデザイン—』鈴木
克明監訳(2018) (株)北大路書房 pp. 141-145

11) 同書 pp. 175-178

Abstract

The purpose of this study is to verify the concept of constructing a music performance curriculum in the college training course for nursery teachers, kindergarten teachers, and elementary school teachers for the cultivating 21st-century skills.

As a result of verification, the concept of music performance curriculum consisted of performance methods linked to music theory and music reading skills, model performances and advice from teachers, clarification of goals through writing worksheets and discussions between teachers and students, and self-development with confidence and satisfaction was led.